DOI 10.18995/24344710.5.101

研究ノート

南フランス・ガール県東部のロマネスク聖堂（2）

中川久嗣

Les Églises Romanes dans le Département du Gard：Bagnols-sur-Cèze et ses Alentours.

NAKAGAWA Hisashi

Résumé

À la suite de la monographie précédente, je traite ici les églises, les abbayes et les prieurés de l'époque romane ou du style roman qui se trouvent à l'est du département du Gard, surtout Bagnols-sur-Cèzeet et ses alentours. Ce pays correspond approximativement au nord de l'ancien diocèse d'Uzès, et aujourd'hui au nord de l'arrondissement de Nîmes. Sur chacune de ces églises, j'analyse son histoire brève, sa forme, sa structure architecturale, ses sculptures, et ses décorations, etc.

本稿ではガール県東部（およそ現在のニーム郡 Arrondissement de Nîmes）のバニョル=シュル=セーズならびにその周辺に点在する中世期のロマネスク聖堂を対象とし、可能な限り知りうるものすべてを訪問調査し考察を加える。

取り扱う聖堂は、「ロマネスク」といっても厳密な時代の限定はせず、11-12 世紀のいわゆる盛期の「ロマネスク」期を中心として、その前後の時代もゆるやかに含めたものである。聖堂全体がロマネスク期のものから、大なり小なり一部分がその時代のもの、建築様式がロマネスク様式をとどめているもの、そして現在では遺構となっているものなども含まれる。

聖堂の配列は、おおよそ現在の行政地域区分に準じて整理することとし、ガール県の県番号（30）、大まかな地域、そして自治体（Commune）の順で番号を付した。同一のコミューンに複数の聖堂がある場合は、「a. b. c. d.」というようにアルファベットで区分した。

聖堂は、本文中で建築物としてのそれを指す場合はそのまま「聖堂」とし、個別的名称としては「教会」あるいは「礼拝堂」を用いた。個々の地名や聖堂の名称については、現地の慣用のものを採用した。

採りあげる聖堂は、基本的にすべて筆者が直接訪問・調査したものである。私有地であったりアクセス困難な場所にあるなどの理由で訪問出来なかった聖堂には▲を記した。写真画像は筆者の撮影による。誌面の都合ですべての聖堂の写真画像をここに掲載することはできない。それらは筆者開設のウェブページ（http://nn-provence.com）で閲覧可能である。なお略記号と参考文献リストは最後にまとめて記した。

30. 1　バニョル=シュル=セーズ（Bagnols-sur-Cèze）とその周辺［承前］

30.1.14a　バニョル=シュル=セーズ／サン=ジャン=バティスト教会（Église Saint-Jean-Baptiste, Bagnols-sur-Cèze）

バニョル=シュル=セーズは、ガール県北東部にあって、ローヌ川から分岐するセーズ川沿いにある人口約 1 万 8 千の中規模都市である。紀元前 3 世紀頃にはヴォルク・アレコミク（ヴォルカエ・アレコミキ）族が定住していたが、その後紀元前 2 世紀にこの地に進出してきたローマ人がアンシーズの泉（sources de l'Ancise）の湧く丘のすぐ東に集落を作った。この泉の水は皮膚病に効くとされ、浴場施設なども作られたが、現在は何も残っていない。当時の集落は《Balneolae》あるいは《Balneolarum》と呼ばれ、これが後のバニョルという名の由来となった。古代ローマ時代を通して、ローヌ川西岸においてルグドゥヌム（リヨン）とネマウスス（ニーム）を結ぶ街道の重要な中継地点であった。この集落の中にもやはり大泉水（Grande Fontaine）と呼ばれる湧水があり、そこにはイシスに捧げられた神殿が建てられていたという。4 世紀頃にはこの地にもキリスト教が本格的に伝わり、ローマ時代のイシスの神殿の跡に最初の礼拝堂が建てられた。それが現在のサン=ジャン=バティスト教区教会がある場所で、この古い礼拝堂に隣接して古い墓地が広がっていた（現在のマレ広場 place Mallet）。

バニョルが最初に史料に現れるのは 950 年頃のことで、さらに 1119 年のプサルモディ修道院（abbaye de Psalmody）のカルテュレール（証書集）に《Baniolas》の名が認められる。この街は、10 世紀以前はベジエ副伯家に連なる一族が領主として支配していたが、11 世紀頃からこの地方の有力な領主であったサブラン家（maison de Sabran）がそれに取って代わった。サブラン家のバロン（または伯）は、その頃南フランス一帯に宗主権を行使していたトゥールーズ伯に臣従する有力臣下でもあった（サブラン家はベジエ副伯家の血筋であったとも言われる）。13 世紀、異端カタリ派に対するアルビジョワ十字軍の結果、それまでトゥールーズ伯の勢力下にあったラングドックがフランス王領に編入されると、ボーケールにセネシャル（国王代官）が置かれ、バニョルもこのセネシャルの管理下に入った。1226 年、引き続きバニョルの領主であったサブラン家のロスタン（Rostang de Sabran）は国王ルイ 8 世（聖王ルイ 9 世の父）に臣従し、バニョルの支配権を国王に譲渡した。なおルイ 8 世は、1223 年に、バニョルにおいて水曜開催の定期市を創設している。1316 年、国王フィリップ 4 世（ル・ベル）はバニョル男爵領をアヴィニヨンの Ursins 枢機卿に譲渡するが、1352 年には Beaufort de Turennes 伯で教皇クレメンス 6 世の兄弟であったギヨーム 3 世ロジェ・ドゥ・ボーフォール（Guillaume

III Roger de Beaufort）が、バニョルおよびアレスやアンデューズ男爵領などを獲得している。1382 年−1383 年には、オーヴェルニュで 1363 年から起こった Tuchins の反乱（Révolte des Tuchins、百年戦争遂行のための徴税に反対した農民反乱）がラングドックに波及する。この反乱はボーケールのセネシャルであった Guillaume 3 世の軍によって鎮圧されたが、バニョルはその際セネシャル軍の駐屯地でもあった。この時代、百年戦争の混乱やペスト渦によってバニョルの人口は激減している。

1585 年、モンモランシー公（Duc de Montmorency）がバニョル男爵領を獲得するとともに、1613 年、Giry 兄弟による絹織物生産が始まり、街は新たな発展の時代を迎えるのであるが、1632 年−1633 年にモンモランシー公アンリ 2 世（Henri II, Duc de Montmorency）による、ルイ 13 世と宰相リシュリューに対する反乱が起き、1633 年、国王軍がバニョルを占拠、都市城壁と領主の城を破壊した。モンモランシー公は処刑され、新たに Conti 公であった Armand de Bourbon がバニョルを手に入れた。その後 1783 年にはプロヴァンス伯ルイ（後のルイ 18 世）がバニョル男爵となっている。この街の名が正式に« Bagnols-sur-Cèze »となったのは、1891 年のことである。1955 年に街の東のローヌ川沿いにマルクール（Marcoule）原子力発電施設が完成したこともあって、人口が飛躍的に増加するとともに市域も拡大して現在に至っている。

この街にはかつてはロマネスク聖堂がいくつか存在したが、現在その名残をとどめるのは街の中心にあるサン=ジャン=バティスト教区教会のみである。オーギュスト・マレ広場の北西角からレピュブリック通りを 20 メートルほど北へ向かい、東へ折れると、聖堂の西ファサードが見える。このファサードはそのまま 1608 年に建てられた方形の鐘塔となっている。鐘塔の上にはフルロン装飾が並ぶ尖塔（1618 年）が載っている。聖堂入口の扉口は、三角形のペディメントを持つギリシア神殿風のポーチの中にある（ペディメントの上の壁面には洗礼者ヨハネの彫像が置かれている）。このペディメントを支える柱は、古代ローマ時代にここにあったイシスの神殿の柱を転用したものとも言われる。扉口を形作る二重の半円形アーキヴォルトが、12 世紀（または 11 世紀後半頃）に建てられたロマネスク様式の聖堂の名残である。この 12 世紀の聖堂は、2 ベイからなる単身廊の東にトランセプトが続き、東端は半円形の後陣（アプス）であった。南北のトランセプトのそれぞれ東側には主後陣の両側に並ぶ形で小後陣が付いていた。また身廊の南側には洗礼堂が付属していた（現在の洗礼堂も同じ場所にある）。サン=ジャン教会はその後、14 世紀から 19 世紀まで幾度も改築と増築が行われた。様式的にはいわゆるラングドック・ゴシックの聖堂である。内部は東西およそ 43 メートルある。扉口からは階段を数段下り、ひねり紐状の太い交差リブ・ヴォールトが架かる背の低いナルテックスをへて、3 ベイからなる広い身廊に入る。12 世紀の聖堂の後陣は、現在のサン=ジャン教会の西から 3 つめのベイの中ほどに位置していた。ナルテックスの上には 18 世紀初めに大きなオルガンが据えられた（19 世紀後半に修復）。身廊の南北両側には小礼拝室が並ぶ。北側の内陣寄りの 2 つの礼拝室（「聖母の礼拝室」と「サクレ=クール礼拝室」）はフランボワイヤン様式のリブ・ヴォールトが架かるもので、14 世紀の建設とされる。身廊南側は半円アーチのアーケードが続き、あたかも側廊を構成しているかのようである。その上にはバラスターが並び、大きな窓の開け

られた明るいトリビューン（階上席）となっている。身廊の天井は各ベイが 4 分交差リブ・ヴォールトである。内陣には、3 面からなる後陣壁に開けられた半円頭形の大きな窓のステンドグラスを通して、南仏の明るい光が射し込んでいる。

Alègre（1908）pp.5-12; Béraud（1941）pp.2-15, pp.41-42; Béraud（1957）pp.25-30; Chabrier（1999）pp.6-9; Maufras（2019）p.263; RIP.

30.1.14b　バニョル=シュル=セーズ／サン=ティルス=ドゥ=マランサン礼拝堂（Chapelle Saint-Thyrse-de-Maransan, Bagnols-sur-Cèze）

バニョル=シュル=セーズの北東約 3 キロにある。国道 N86 を北へ向かい、セーズ川を渡って約 150 メートルで東に折れ、県道 D360（Chemin Carmignan）を約 2 キロ進むとマランサンに向かう細い道（Chemin Maransan）が分岐するので、それを約 400 メール東に行くとその道沿いにサン=ティルス=ドゥ=マランサン礼拝堂が建っている。D360 からもブドウ畑に囲まれたこの礼拝堂の西ファサードが遠くによく見える。聖ティルスは、小アジアのスミュルナ（今のイズミル）出身で、同地の司教ポリュカルポスによって布教のためにガリアに送られ、ブルゴーニュのオータンで殉教したとされている。

ここマランサンにあったプリウレ（小修道院）の名が史料に出てくるのは 1314 年である。1375 年、教皇グレゴリウス 11 世によってこのプリウレはヴァルソーヴ修道院（Abbaye de Valsauve, in［30.1.10］）に付属させられた。18 世紀後半にはヴィヴィエ司教区のシャンボン修道院（Abbaye des Chambons、現在のアルデッシュ県ボルヌ）の管理下に置かれていた。しかしこの地方の他の多くの聖堂と同じように、大革命によって国有財産として売却され、その後は農家の倉庫などとして使用された。窓は埋められ、積み石も部分的に崩れるなど保存状態は良くなく、まったく放置されるがままであった。文化遺産として修復保存のための組織が作られたのは、ようやく 2010 年になってからのことである。現在は外部の修復のみならず内部も整備されて見学が可能となっている。

この礼拝堂の建設が始まったのは 10 世紀にまでさかのぼるとも言われる。外壁の石積みの様子に違いがあることから、その後大まかに 4 つのフェーズを経て 12 世紀末頃に完成されたと考えられている。まず最初は、身廊北壁の下半分で、不整形で小さめの石が素朴に積まれている。ここは最も古く、10 世紀末頃までさかのぼる部分であるとされる。次は北壁の大部分と、後陣と身廊南壁のそれぞれ下半分で、横長に切り整えられた黄色がかった砂岩の積み石が特徴である。第 3 のフェーズでは身廊南壁の上半分、後陣の上半分、凱旋アーチ外壁、そして西ファサードが造られた。積み石は黄色みが多少薄くなった砂岩が、より端正に切り整えられ、きっちりと組まれている。この時期の石材の表面には、身廊南壁や後陣上部において、石工が刻んだ線刻（marque de tâcheron）が見られる。«A»、«B»、«M»、そして«P»である。P. A. Clément によれば、これらの刻印は、とりわけサン=ポール=トロワ=シャトー（Saint-Paul-Trois-Châteaux、ドローム県）のものに似ているという。最後のフェーズ（12 世紀後半）では、身

廊側壁、凱旋アーチ外壁、西ファサードのそれぞれの最上部、そして内部のヴォールト、わずかに尖頭形となった壁アーチ、石灰岩の切石を積んだ凱旋アーチなどが造られた。

30.1.14b　Saint-Thyrse-de-Maransan

聖堂のプランはシンプルで、2 ベイからなる単身廊に半円形の後陣が付く。同じバニョル=シュル=セーズにあるサン=マルタン=ドゥ=サドゥラン礼拝堂［30.1.14c］とよく似ている。ただし大きさはこちらのサン=ティルス=ドゥ=マランサン礼拝堂の方が小ぶりである。凱旋アーチ（勝利門アーチ）部分の上にかつて立っていたと思われる鐘楼は失われている。西ファサードはサン=マルタン=ドゥ=サドゥランと同じく、中央下部に半円頭形の出入口（無装飾）が開き、上部では切妻の中ほどに銃眼のような細長い開口部が付けられている。出入口は南北の身廊側壁にも付けられていて、北側のそれは 20 世紀前半までは埋められてしまっていた。身廊に付けられた扶壁は北側では 3 つ、南側では 2 つで、後陣に隣接するものは失われている。側壁上部の窓は南壁のみ 2 カ所に開けられていて、外に向けて隅切りされた半円頭形の小さめなものである。半円形の後陣には南側に大きめの窓が開けられている。形は外に向けて隅切りされた半円頭形であるが、内部では縦長の方形となっている。後陣の東端には、かつては半円頭形の窓が開けられていたが、現在は埋められてしまっている。後陣の石積みは、先にも触れたように、下半分と上半分では切石の大きさや石積みの様子が異なっており、上半分の石積みの方が、より端正で整えられたものである。後陣の最上部を巡るコーニスには、彫刻装飾が施された横長の石が並べられている。素朴な形のパルメットの連なり、櫛の歯文様、横に長く延びた葉脈、また二重の半円アーチによる小さなニッチが 3 つ並び、その左隣にツルハシが彫られているものもある。この後陣の壁には、サン=マルタン=ドゥ=サドゥラン礼拝堂と同じく、足場を組むため木材を差し込んだ小さな壁穴（trous de boulin）が一定間隔で並んでいる。

聖堂内部は、床からヴォールトの起拱点まで立ち上がる方形のピラストル（壁付き柱）とその上に架かる半円形の横断アーチが、身廊を 2 つのベイに分けている。天井は半円筒形トンネル・ヴォールトである。身廊側壁の壁アーチおよび後陣の半ドームが身廊に開くアーチは、L.-H. Labande が伝える L. Alègre のデッサンでは、かなりはっきりとした尖頭形として描かれているが、実際にはわずかに尖頭形となったほとんど半円形とも言えるアーチである。この凱旋アーチに付けられている十字型の開口部は、現在は埋められている。後陣東端の半円頭形の窓も埋められているが、南側に開けられた窓は、聖堂内部に向けては縦長の方形となっていて採光の役割を果たしている。聖堂内部には目立った彫刻装飾は見られないものの、身廊側壁の壁アーチを受けるインポストの一部に、ひねり紐状のモールディングが見られる。

サン=ティルス=ドゥ=マランサン礼拝堂から道を隔ててすぐ北には、15 世紀後半に建てられた館（manoir）が残っている。かつてはヴァルソーヴ修道院が所有するものであったとされる。

現在は個人所有の農家となっている。八角形で 5 階からなるルネサンス様式の塔が美しい。かつてはこの館の敷地内にもゴシック様式で建てられた小さな礼拝堂があったが、現在は完全に失われている。

Béraud（1941）p.48; Béraud（1957）p.31; Clément（1993）pp.385-387; Labande（1902）pp.67-73; Nougaret et Saint-Jean（1975）p.25; RIP.

30.1.14c　バニョル=シュル=セーズ／サン=マルタン=ドゥ=サデュラン礼拝堂 （Chapelle Saint-Martin-de-Saduran, Bagnols-sur-Cèze）

バニョル=シュル=セーズの外周道路北端のジャン=ジョレス広場から国道 N86 で 1.5 キロ北へ向かう。県道 D980 に折れてさらに西におよそ 1 キロ進むと、北に入る« Chemin de la Chapelle »という小径があるので、それを 400 メートルほど行くと、ブドウ畑に囲まれたサン=マルタン=ドゥ=サデュラン礼拝堂に至る。ここは古くからゼーズ川から今のアルデッシュ方面に向かう街道の通り道であった。建設されたのは 11 世紀末頃または 12 世紀初め頃で、12 世紀の終わりには大きな改修工事が行われている。この礼拝堂の名が史料に最初に現れるのは 1254 年で、14 世紀半ばには教皇クレメンス 6 世によって、ヴァルボンヌのシャルトルーズ修道院（Chartreuse de Valbonne ［30.1.2］）の管理下に置かれた。中世以来この礼拝堂には、皮膚病を患う子供とその親が病気の治癒を祈願するために巡礼として訪れた。しかしフランス革命の後、国有財産として売却され、現在は個人所有となって私有地の中にある。聖堂の南壁側には所有者の住居が直接建てられており、聖堂自体も住居兼倉庫として利用されているため、残念ながら内部は見ることができない。20 世紀初め頃までは聖マルティヌス（サン=マルタン）の祝日である 11 月 11 日にこの成人を祝うセレモニーが行われていたが、近年はそれも絶えているようである。

聖堂の基本プランは、2 ベイからなる身廊に半円形の後陣が続くシンプルなものである。サン=ティルス=ドゥ=マランサン礼拝堂［30.1.14b］とよく似ている。身廊は東西の長さ（内部が約 14 メートル）に対して、地面から屋根の上までが約 11 メートルあるため、全体的に高さを感じさせる。側壁には、最上部の水平のコーニスの少し下まで、太い扶壁が南北それぞれに 3 つずつ立ち上がる（ただし南側は住居のために見えない）。北壁の東側のベイには中ほどの高さのところに方形の開口部がある。これは建設当初にはなかったものである。西ファサードには中央下部に半円頭形の小さな出入口があり、上部の切妻の中央にもごく小さな細長い開口部がある。それら小さな開口部以外は切り整えられた積み石による壁面のヴォリューム感

30.1.14c　Saint-Martin-de-Saduran

が支配的である。切妻中央の細長い開口部の左右両側には、穴の開けられた小さな方形の石が組み込まれている。ニームの円形闘技場あるいはオランジュの円形劇場といった古代ローマ時代の建築物に見られるような、天幕（velarium）を張るためのポールを差し込む石に似ているとの指摘もある。ここサン=マルタン=ドゥ=サデュランでも、キリスト教の祝日や集まった巡礼のために天幕が張られたのであろうか。この西ファサードの壁ぎわ（小さな扉口のすぐ隣）には、ローマ時代の墓石とも思われる方形の石（無碑銘）が置かれているが、これはかつてこの礼拝堂の祭壇として使用されていたものであると言われる。

聖堂の東側は半円形の後陣である。黄色がかった砂岩の切り整えられた石が端正に積まれている。その壁面には、サン=ティルス=ドゥ=マランサンと同じように、足場を組むため木材を差し込んだ小さな壁穴（trous de boulin）が一定間隔で並ぶ。この半円形の後陣の、瓦を並べた屋根のすぐ上は、内部が凱旋アーチとなっている三角形の切妻形の外壁で、その中央に細長い半円頭形の窓が開けられている。外側に向けて隅切りされており、さらにそこに半円形のアーキヴォルトが架かる。このアーキヴォルトは二重に組み合わされた円筒形のモールディングとなっており、一番外側を浅浮き彫り状のアーチが縁取りしている。これらは左右両側で水平のコーニスを介して柱頭彫刻の付いた小円柱が受けるが、向かって右側の小円柱は失われている。現在残る左側の小円柱の柱頭は、アカンサスと渦巻き葉飾りである。この凱旋アーチの外壁の上には、かつては小さな鐘楼が立っていたが、現在はその土台部分が残るだけである。

礼拝堂の内部の様子は、L.-H. Labande が 1902 年のモノグラフの中で L. Alègre のデッサンとともに詳しく伝えている。それによれば、内部は 2 ベイからなる身廊に半円形の後陣が続く。東西約 14 メートル、南北幅は約 5 メートルである。天井は水平のコーニスの上に半円筒形のトンネル・ヴォールトが架かり、横断アーチが 2 つのベイを区切っている。身廊の側壁には二重のアーキヴォルトとなったわずかに尖頭形の壁アーチが並ぶ。南側の壁では壁アーチの中にさらにニッチのアーチが付けられている。南壁の東側の壁アーチの中には方形の開口部が付けられているが、これは隣接する住居のために外からは見ることができない。身廊と後陣を区切る凱旋アーチの部分は、最初にこの聖堂が建設された時期よりも後の 12 世紀終わり頃に改築されたものである。身廊側壁のコーニスの帯や壁アーチに付けられたインポストなどに簡単な図形風の彫刻装飾が付けられている。後者には小さな十字形の浅浮き彫りなどが見られる。なお L.-H. Labande によれば、ロマネスク期の聖水盤（高さ 60 センチで、八角形の柱身の上に丸い盤が載る）が聖堂内部の隅に置かれているとされるが、これも現在は確認できない。
Béraud（1941）p.47; Béraud（1957）pp.30–31; Clément（1993）p.387; Labande（1902）pp.61–67; Nougaret et Saint-Jean（1975）p.25.

30.1.14d　バニョル=シュル=セーズ／サン=ヴィクトール=ドゥ=カステル礼拝堂 （Chapelle Saint-Victor-de-Castel, Bagnols-sur-Cèze）▲

バニョル=シュル=セーズの北西約 5 キロ、サン=マルタン=ドゥ=サドゥラン礼拝堂[30.1.14c]からは直線距離にして北西に約 1 キロほどのオー・カステルの山中にあった 6–7 世紀頃の古い

礼拝堂である。L. Alègre によれば後陣は五角形で、壁面の石積みはヘリンボーン模様（opus spicatum）であったという。もともとこの礼拝堂のものであった初期キリスト教時代の祭壇（l'autel paléochrétien de Saint-Victor-de-Castel、7 世紀頃）は、紆余曲折を経て現在はポン=サン=テスプリの「ガール県宗教芸術美術館」（Musée d'art sacré du Gard, Pont-Saint-Ésprit, in［30.1.1］）に展示されている。このサン=ヴィクトール=ドゥ=カステル礼拝堂の遺構については、やはり L. Alègre による 19 世紀中頃のデッサンが残されているが、現在はごくわずかな痕跡を残すだけのようである。その正確な場所や現状などは、残念ながら筆者には確認できなかった。
Alègre（1871）pp.396–399; *CAG*, 30/2, p.175; Labande（1902）pp.54–60; Narasawa（2015）pp.73–75.

30.1.15　シュスクラン／ジコンのサント=マドレーヌ礼拝堂
（Chapelle Sainte-Madeleine de Gicon, Chusclan）

バニョル=シュル=セーズから東に向かうとすぐに鉄道をくぐるので、県道 D165 を進み、セーズ川を渡る。県道 D360 に突き当たり、右折してさらにそのままおよそ 2.8 キロほど東に行くと、北に向けて丘を登る道が分かれるので« Site de Gicon »という標識に従って進む。1.2 キロほどで« Ferme de Gicon»というブドウ農園の建物が現れる。そのまま上り続けると 1.8 キロでジコン城（Château de Gicon）に至るが、農園の建物の裏手から西に進むと約 400 メートルでサント=マドレーヌ礼拝堂に着く。バニョル=シュル=セーズから直線距離にして東へ約 5 キロの山の中腹である。

ジコン城は、高さ約 250 メートルの岩山の上に 12 世紀に築かれた城塞である。もともとはケルト人のオッピドゥムがあった場所で、城の西側の崖の中腹にはやはりケルト人が聖域としていた洞窟が残っている。12 世紀にはユゼス司教がこの城を所有した。アルビジョワ十字軍の結果、この地は王領に編入され、14 世紀になって、国王フィリップ 4 世がボーケールのセネシャル配下であった Guilhem de Saint Just に城を与えると、彼は城主の居館（Maisonr forte）を建設するなどした。17 世紀に起こった国王ルイ 13 世に対するモンモランシーの反乱にジコンの領主が与したことで、リシュリューはこの城のドンジョン（主塔）の破壊を命じている。その後は城の所有者がたびたび入れ替わることとなり、大革命を迎えると破壊され廃墟となって長く放置された。現在の所有者はシュスクランのブドウ栽培業者たちで、20 世紀以降は少しずつ修復工事が行われ、観光客なども迎え入れるようになり今日に至っている。L.-H. Labande によると、この城の中にもロマネスク期の礼拝堂があったというが、現在は失われている。

サント=マドレーヌ礼拝堂は、城から直線距離で南へ 150 メートルのところに建っている。建設は 13 世紀で、史料にその名がプリウレ（小修道院）として初めて現れるのは 1314 年である。サン=マルタン=ドゥ=サドゥラン礼拝堂［30.1.14c］と同じく、長い間ヴァルボンヌのシャルトルーズ修道院（Chartreuse de Valbonne）の管理下に置かれていた。現在残る建物はロマネスク様式ではあるが、1897 年と 1987 年に再建工事が行われており、全体的に古い部分は多くはない。2 ベイからなる長方形の身廊は東西の外寸がおよそ 10 メートル、南北の外寸は 6.15 メ

ートルである。かつて身廊の東側に付いていた半円形の後陣は失われてしまっている。身廊の天井は交差ヴォールトで、東側のベイ（方形の内陣となっている）の南壁上部には大きな丸窓が開けられている。その丸窓の下に以前は半円頭形の出入口が開けられていたが現在は埋められており、唯一の出入口は西ファサードにある。身廊の外壁上部は、南北ともに三角形の切妻が 2 つずつ並ぶ仕様になっている。西ファサードと東端の外壁も切妻形となっている。

なおシュスクランのサン=ジュスト教会のすぐ近くには、サン=トギュスタンと名付けられたメディアテークがある（Médiathèque Saint-Augustin）。これはもともとは 11 世紀後半あるいは 12 世紀前半頃に建てられた古いロマネスク聖堂を、その後大幅に改修するなどして再利用したものであるが、壁アーチや柱などに残されているフレスコ画は 15 世紀あるいは 16 世紀のものである。またシュスクランのコミューンには、セーズ川の対岸すぐのところにロマネスク期のサン=テメテリー礼拝堂（Chapelle Saint-Émétery）が、さらに北東のローヌ川沿いのカドネ地区（マルクールの原子力発電施設の敷地のすぐ北あたり）にはやはりロマネスク期のサン=ジョルジュ礼拝堂（Chapelle Saint-Georges de Cadenet）があった。共に 20 世紀初め頃まではわずかな遺構が残っていたようであるが、現在は完全に消滅している。

Labande（1902）pp.82-85; Laville（1877）pp.115-122; RIP.

30.1.16a　サブラン／サント=アガト城塞礼拝堂（Église Ste-Agathe, Sabran）

バニョル=シュル=セーズから県道 D6 を西へ 7 キロで県道 D166 に折れ、南に 3 キロ行くとサブランの村に至る。村を見下ろすようにして封建時代の城の遺構と、そこに寄り添うようにして建つサント=アガト城塞礼拝堂がある。聖アガト（聖アガタまたはシチリアのアガタ）は 3 世紀に殉教したシチリアの聖人で、美しい彼女に目をつけたローマの役人の意に従わなかったことから、乳房を切り落とされ、獄中で亡くなったとされる。

サブランとその城は、中世のプロヴァンス・ラングドックにおける有力な封建領主であったサブラン家ゆかりの場所である。その祖先はカロリング家のカール・マルテルにつながるとも言われるが、確かなことはよく分からない。11 世紀にはここに定着したことで、この地がサブランと呼ばれるようになった。その頃のサブラン家の当主ギヨーム 1 世（Guillaume Ier de Sabran, 1040？-1105？）は、トゥールーズ伯の有力家臣として第 1 回十字軍（1096-1099 年）に参加し、アンティオキアやイェルサレムで戦っている。その後もサブラン家はトゥールーズ伯に臣従するが、ギヨーム 1 世の次男の家系であるレーモン 1 世（Raimon Ier de Sabran, 1115？-1209）はフォルカルキエ女伯ジェルサンド（またはガルサンド、Gersande de Forcalquier）と結婚し（1178 年）、フォルカルキエ伯を兼ねる。やはりガルサンドという名のその娘（Garsende de Sabran, 1180-1242）はフォルカルキエ伯位を継いで、プロヴァンス伯アルフォンス 2 世と結婚する（彼女は 1225 年に現在のヴァール県にあるラ・セル修道院に隠棲したことで知られる）。このアルフォンスとガルサンドの息子が、プロヴァンス伯とフォルカルキエ伯を継いだレーモン=ベランジェ 4 世（Raimind-Bérenger IV de Provence, 1195-1245）である。彼とベアトリーチェ・ディ・サヴォイアの間に生まれた 4 人の娘たちは、長女

マルゲリート（Marguerite）はフランス国王ルイ 9 世と、エレアノール（Éléanore）はイングランド国王ヘンリー3 世と、サンシー（Sancie）はヘンリー3 世の弟のコーンウォール伯リチャードと、そして末娘のベアトリクス（Béatrix）はフランス国王ルイ 9 世の弟シャルル・ダンジューとそれぞれ結婚し、サブラン一族の血は、こうして英仏両国の王家の中に流れ込むこととなった。またその後サブラン一族の中では、アンスイ（Ansouis）男爵にしてイタリアのアリアーノ伯でもあったエルゼアール（Elzéar de Sabran, 1285-1323）とその妻デルフイーヌ（Delphine de Sabran, 1283-1360）が知られている。この夫婦は、純血のままの結婚生活、病者や貧者への慈悲と施しなどによって、後にカトリック教会から夫は聖人に列聖され、妻は福者に列福された。二人の聖遺物は、今はアンスイの教会と、アプトのサント=アンヌ大聖堂に保管されている。サブラン一族の血筋自体はその後も長く受け継がれ、大革命をも乗り越え、19 世紀以降はサブラン=ポンテーヴ家（Sabran-Pontevès）として今日まで続いている。

サブランの城は、もとはケルト人のオッピドゥムがあった場所に建てられた。現在残る 4 つの塔の遺構はサブラン家によって建設された 12 世紀のもので、それらの塔のうち最も新しいものは 13 世紀初め頃のものとされている。その後サブランの領地は複数の領主によって分割所有されていた模様で、16 世紀になると Combes 家がサブランの領主となった。1573 年、宗教戦争の最中にプロテスタントによって攻撃・占領され、大きな被害を受けた（1575 年にユゼス公が奪還）。1602 年には、サブランの領地の半分はラングドック総督 Pierre d'Augrier が所有したが、その後この地は Montclus の領主が所有した。1632 年、時の領主がモンモランシー公アンリ 2 世の反逆に加担したため、ルイ 13 世（1601-1643）はサブランの城の破壊を命じている。長いこと城は荒廃したままであったが、1860 年になって、城の中央の塔の遺構の上に聖母マリアの大きな白い立像が据え付けられた。ただしこの像は、サブランの城の歴史にも聖アガト礼拝堂にも何ら関係がない。

城に寄り添うようにして建つサント=アガト礼拝堂は、もとはサブラン城の城塞礼拝堂（Chapelle castrale）で、建設は 12 世紀後半である。サブラン家のために建てられたというよりは、この城を守備する騎士たちのために建設されたものであるとも言われる。その後は教区教会として、大革命までユゼス司教の管轄下にあった。宗教戦争の際には城とともに大きな被害を受けた。1881 年頃から修復と拡張工事が開始され、最近では 1980 年代になってから大々的な修復作業が行われている。現在はコンサートや文化的な展示会などにも使われている。

30.1.16a　Sainte-Agathe de Sabran

西ファサードは完全に建て替えられている。下半分は、大きさは不揃いであるが比較的きっちりとした石積みで、その中央には近代になって造られた扉口が開く。上半分は不整形な石積みで、中央に丸窓が開けられている。

身廊の南壁には方形の大きな窓がひとつ開けられており、その真下には、今は埋められてしまった半円頭形の出入口の名残が見られる。後陣側には聖具室の建物が増築されている。一方、古い石積みが残る北壁には、後陣の近くに小さな方形の窓があるだけで他には開口部はない。すぐ隣に建つ城の塔（tour des 4 baies）との狭い隙間に、小さなフライング・バットレス（アルク・ブータン／飛び梁）が架けられている。後陣は、中段は切り整えられた長方形の中石材（moyen appareil）が並ぶ。東端に開けられた半円頭形で隅切りされた窓の枠組みも同様である。後陣の上部と下部は不整形の石積みである。上部が三角形となった縦長の鐘楼は、聖堂内部の身廊と内陣の間の「凱旋アーチ」よりも西寄りの位置に立っている。

聖堂内部は 4 ベイからなる単身廊形式で、その天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトである。尖頭形の横断アーチはヴォールトの起拱点にあるコーベルが受け止める。身廊の南北両側にはわずかに尖頭形となった二重の壁アーチが並ぶ。特に北側の壁アーチは南側のそれよりも奥行きがある。これらの壁アーチはインポストを介して方形のピラストルが受け止めている。北側の最東端の壁アーチのみ尖頭形ではなくて半円形アーチであるが、この部分が最も古いとされる。凱旋アーチもわずかに尖頭形である。ただし後陣の半ドームは半円形である。後陣は身廊と同じだけの幅で、中央には半円頭形で隅切りされたロマネスク様式の窓が開き、ステンドグラスがはめられている。その窓を境にして内部の壁も様子の異なる石積みとなっている。後陣には半ドームが架かるが、その石積みは全く不整形なものである。

Alègre（1908）pp.7–11; Anonyme（1897）pp.107–115; Clément（1993）pp.376–377; Dieltiens（2011）pp.128–129, pp.321–322; Labande（1902）pp.161–164; Moreau（1997）pp.170–171.

30.1.16b　サブラン／コンブのサン=ジュリアン=ドゥ=ピストラン礼拝堂

（Chapelle Saint-Julien-de-Pistrin, Combe, Sabran）

バニョル=シュル=セーズから県道 D6 を西へおよそ 3 キロ進むと、コンブの集落に向かう D6a が分かれる。その道に入るとすぐのところに、サン=ジュリアン=ドゥ=ピストラン礼拝堂がコンブの墓地に囲まれるようにして建っている。建設は 12 世紀とされる。「ピストラン」の語源であるラテン語の「ピストリヌム」（pistrinum）が、古代にここにあったヴィラのパン焼き小屋を指していることからその名が付けられたと言われるが、「ピストリーノ」（Pistrino）という名前の人物が 12 世紀の史料の中に現れており、その人物とこの聖堂の関わりも指摘されている。宗教戦争の際には被害を受け、1605 年に大がかりな再建工事が行われた（そのことを記した石版が南側外壁の扉口の上に埋め込まれている）。長い間、教区教会であったが、1807 年にその地位をノートル=ダム=ドゥ=コロンビエ教会［30.1.16c］に譲った。1990 年代に入って断続的に修復工事が行われている。とりわけ 1995–1996 年の修復が大々的で、後陣の屋根が造り直されたのもその時のことである（それを記した石が後陣の屋根の上に据えられている）。20 世紀になってからは祭事などの機会も少なくなったが、現在ではさまざまな文化行事、絵画等の展示会、コンサートや講演会などに使用されている。

1990 年代の修復工事もあって、現在は全体的に非常にきれいな状態である。扶壁のない長方形の身廊部に半円形の後陣が付くだけのシンプルな形であるが、その姿は今もロマネスクの小聖堂の端正な美しさを保っている。身廊部南側の外壁上部にはライオンと羊の 2 つのガーグイユが付けられている。また外に向けて大きく隅切りされた半円頭形の窓が 2 つ開けられている。聖堂内部への出入口も南壁に開けられている（その横には小さめの方形の開口部があるが、鉄格子がはめられていて現在は使われていない）。身廊部北壁には、窓はないが東側に方形の祭室と小さな聖具室が 17 世紀に増築されている。また外壁の中ほどに半円アーチが架かる出入口の名残が認められる（今は埋められている）。その出入口のアーチの石には石工による線刻記号« M »が残されている。西ファサードには扉口はないが（ただしそれらしきものの名残が認められる）、大きさの異なるロマネスク様式の半円頭形の窓が上下に 2 つ並んでいる。こうした仕様は、ガール県東部のこの地域では珍しいものである。なお下の窓は、外に向けてのみ隅切りされている。後陣は半円形で、下半分は不整形な粗い割石積み、上半分は切り整えられた切石積みである。後陣の上部を巡るコーニスには中央部分にパルメットや尖葉文が残るが、コーニスの大部分は丸型の枠取りだけが並んだものである。それがパルメットなどの彫刻を施す前の状態なのか、それともそうした彫刻を削り取ったものなのかは判然としない。そのコーニスのすぐ下には、歯車形の連続帯が同じように後陣上部を巡っている。ただしこの歯車装飾は、ギリシア風の雷文のように部分的な変形が加えられたものとなっている。こうした歯車形の帯は、古代の伝統の強いプロヴァンスの影響を感じさせるが、この地域ではやはり珍しいものである。なお L.-H. Labande によれば、後陣南側に開けられた窓のタンパン部分には、3 つ連なる円形の彫刻装飾が施されているというが、筆者には確認できなかった。凱旋アーチの上に立つ鐘楼は、1681 年と 1847 年に修復されたもので、鐘を吊すベイ 1 つからなるすらりと縦に細長いものである。鐘楼のすぐ下、後陣の半円錐形の屋根の頂部のところには、ごく小さな凸凹型の開口部がある。

聖堂内部の身廊部分（東西 13 メートル、南北 5.8 メートル）は、横断アーチで区切られた 2 ベイからなり、西側のベイは 1605 年の修復工事の際に大きく建て替えられた。またその際に、東側のベイの北に方形の祭室と小さめの聖具室が増築された。天井は半円筒形トンネル・ヴォールトである。身廊部の側壁は、厚い部分で 1.7 メートルある。南北両側に半円形の壁アーチが付けられている。南側に開けられた窓は内部に向けて隅切りされている。身廊と後陣の間の凱旋アーチは一見すると半円形であるが、よく見るとほんのわずかながら尖頭形となっている。後陣にはコーニスの上に半ドームが架かる。東端には半円頭形で内部に向けて隅切りされた窓が開けられている。この後陣には、近年に

30.1.16b　Saint-Julien-de-Pistrin

なって赤い彩色が施されたが、それが妥当なことであったかどうかは残念ながら疑問であると言わざるを得ない。身廊の北西端の隅にある方形のピラストルの柱頭部分には、下にいる人間を上から見下ろすようにして不思議な人物の顔が彫刻されている。

聖ジュリアン（ユリアヌス）はリヨンの南のヴィエンヌで生まれ、ローマの軍人となり、304年にオーヴェルニュのブリウドで殉教した。同地のサン=ジュリアン・バジリカ聖堂地下クリプトにはこの聖人の聖遺物が保管されている。フランスでは広く崇敬を集めた聖人の一人である。ヤコブス・デ・ウォラギネ（2006）pp.352–353; Béraud（1941）p.47; Béraud（1957）p.30; Clément（1993）pp.278–279; FSAF; Labande（1902）pp.73–77; GV.

30.1.16c　サブラン／ノートル=ダム=ドゥ=コロンビエ教会

（Église Notre-Dame-de-Colombier, Sabran）

バニョル=シュル=セーズから県道 D6 を西へおよそ 3 キロ進み、コンブの集落に入る手前で県道 D274 を南に折れて 1.6 キロである。県道から西へ少し入ったところに村の広場があり、ノートル=ダム教会もその広場の一角に建っている。

もとは 12 世紀に建設された。この聖堂についての史料は少なく、その歴史もあまり知られていない。かつては教区教会であったが、サブランの教区に統合された。建物自体は 19 世紀になってヴォールトを架け替えて建物自体の高さが加えられた。そのことは石積みの形と色の違いから判る。特に身廊の東側の外壁、すなわち凱旋アーチ（勝利門アーチ）の外壁にそうしたかさ上げの跡がよく残っている。そこではもとからの壁面の石積みは切り整えられた中石材によるきっちりとしたものであるが、増築された部分は不整形の小石材による。身廊外壁に付けられている扶壁はその外壁のかつての高さまでしかない。身廊の南側には隅切りされた半円頭形の窓が 3 つ開けられており、さらにその窓の下に、近代になってから 2 ベイからなる祭室が増築されている。南壁の西寄りの所に扉口が開く。これは近代になって造り替えられたもので、半円形のタンパンには漢字の「大」の形をした装飾された十字架が彫刻されている。この扉口の向かって右側の側壁にはガロ=ローマ時代のものと思われる墓碑の断片が埋め込まれている。凱旋アーチの上に、四方に鐘を吊すベイの開いた方形の鐘楼が立ち、その上には尖塔が載る。半円形の後陣は、異なる石積みの層が 3 つ重なったものとなっている。下段は小石材の粗い並べ方で、中段が中石材によるきっちりとした石積み、上段はいろいろな大きさの不整形な石が粗く積まれている。後陣の上の切妻形の壁（凱旋アーチ外壁部分）には、二重のアーキヴォルトに縁取られた小さな半円頭形の窓が開けられていて、そのアーチは左右で小円柱に支えられ

30.1.16c　Notre-Dame-de-Colombier de Sabran

ている。なおこうした仕様は、ここから約 5 キロ北にあるサン=マルタン=ドゥ=サドゥラン礼拝堂［30.1.14c］とよく似ている。コロンビエでは、アーキヴォルトを大きめのインポストを介して支える小円柱の柱頭彫刻が、単純な形のアカンサスとその中央に丸い花弁を配したものとなっている。

内部は 4 ベイからなる単身廊形式で、右端に半円形の後陣が付く。天井は半円筒形トンネル・ヴォールトで、3 つの横断アーチが架かり、そのうち中央のものだけが方形のピラストルとなって床まで下りる。残りの 2 つは、ヴォールトの起拱点にある持ち出し（コーベル）が受け止める。その起拱点には水平のコーニスが身廊の南北の側壁に巡らされている。身廊側壁には半円形の壁アーチが並び、それぞれのアーチの中に開けられた窓は、小円柱に支えられた半円アーチに縁取りされている（ただし西端のベイには窓はない）。尖頭形の凱旋アーチの上部にも同様の窓が開けられており、やはり小円柱が窓の左右に置かれている。さらに半円形の後陣にも正面（東端）に、左右の小円柱にはさまれた縦長で半円頭形の窓が開く。水平のコーニスの上は半ドームとなっている。L. Alègre の残したデッサンによれば、凱旋アーチを受け止めるインポストに、組紐文様と« STEPHANVS BERTRANVS »という彫刻家あるいは建築家らしき人物の名前が彫刻されているというが、19 世紀末頃に失われてしまったようで、筆者にも確認できなかった。

Clément（1993）pp.387–388; Favreau et Michaud（1988）p.60; Labande（1902）pp.165–170.

30.1.16d　サブラン／ブサルグのサン=サンフォリアン礼拝堂

（Chapelle Saint-Symphorien de Boussargues, Sabran）privée

ブサルグはサブランのコミューンにあるが、位置的にはバニョル=シュル=セーズとサブランのちょうど中ほどにあたる。バニョルから県道 D6 を西へおよそ 3 キロで県道 D274 に入り、南へ 2 キロほど行くと、今はワイン醸造のドメーヌであるブサルグ城へ向かう小道（私道）が分かれるので、それを 1.2 キロほど登る。

ブサルグの城は、古代ガロ=ローマ時代には大きな農場を営むヴィラがあった場所に建てられている。11 世紀末あるいは 12 世紀初め頃に、トレスクの領主でもあったサブラン家のギヨーム 1 世がテンプル騎士団に寄贈したと言われる。14 世紀にこの騎士団の解体を受けて、聖ヨハネ騎士団（病院騎士修道会）が引き継いだようであるが、その後は所有者が目まぐるしく変わり、現在は個人所有のドメーヌとなっている。サン=サンフォリアン礼拝堂（またはサン=フロラン Saint-Florent 礼拝堂とも言われる）は、こ

30.1.16d　Saint-Symphorien de Boussargues

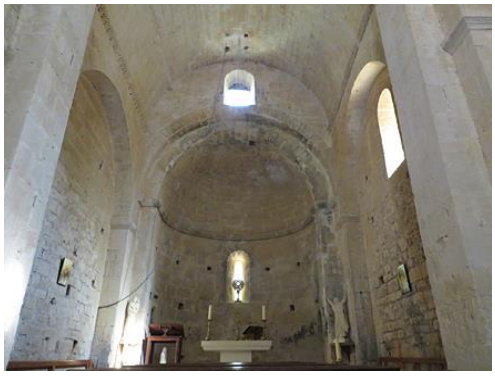
のシャトーの裏手からさらに森の中の小道を 200 メートルほど歩くと、周囲を緑豊かな木々に囲まれた静かな場所にひっそりと建っている。ドメーヌの敷地内であるが、礼拝堂の鍵はこのドメーヌで借りることができる。

建設は 12 世紀である。それ以前のカロリング期の古い聖堂を建て替えたものである（さらにその前には古代ローマ時代の小さな建物があったとされる）。長方形の身廊に半円形の後陣が付くというシンプルな形である。カロリング期の古い聖堂の石積みは、南側の外壁（向かって右側部分）と、後陣の一番下の土台部分に残されている。外壁には南北ともに扶壁は付けられていない。ただし足場を組むための小穴（trous de boulin）が一定間隔で並んでいる（これは聖堂内部にもある）。南側の外壁には半円頭形で隅切りされたロマネスク様式の窓が 2 カ所開けられている（北側の側壁には窓はない）。そのうち東側の窓の向かって斜め左下には、線刻された半円形の日時計が残されている。半円形の後陣にも東端にロマネスク様式の窓が開く。後陣の最上部には二重のコーニスが巡るが、そこには、北寄りのところにかなり摩耗した星形の彫刻装飾が残されているのがわずかに認められる。L.-H. Labande が伝える L. Alègre のデッサンによれば、それ以外にも尾の長い不思議な動物の彫刻があるとされるが、筆者には確認できなかった。この後陣の上、すなわち凱旋アーチの外壁には、身廊北壁の東端部にかけて、石工による線刻が多く残されている。十字形の他、さまざまな方向に向けられた« P »や« q »である。この凱旋アーチの壁にはやはり半円頭形のロマネスク様式の窓が開くが、内部は方形となっていて、その上に載る半円形のタンパン部分には花弁を大きく放射状に開く半円形のヒナギクが彫刻されている（これは外側だけではなく内側も同じ）。

同様のモチーフの花弁彫刻は身廊南壁に付けられた扉口上部にも見ることができる。この半円頭形の扉口は、南壁に開けられたやはり半円頭形の窓の真下にあるが、特徴的なのは、その半円アーチのすぐ上に、植物彫刻の施されたフリーズが、古代風のペディメントのように三角形に埋め込まれ、一種のアーキヴォルトを形作っていることである。そのフリーズは、向かって左側の辺はパルメットに包まれた丸い果実（あるいは花弁）が連なり、右側の辺は細長い尖葉文が連続するものとなっている（その右側のフリーズのすぐ外側には小さな花弁が 3 つ集まった彫刻が残されている）。ヒナギクの放射状の半円形花弁彫刻は、そのペディメントの頂点の内側に埋め込まれている。こうした半円形花弁彫刻は、同じラングドックでは例えばオード県のサン=ポリカルプ（Saint-Polycarpe）修道院教会（12 世紀）の祭壇彫刻にも見られるものである。また三角形の古代風ペディメントは、プロヴァンスのタラスコンにあるサン=ガブリエル礼拝堂や、ル・トールのノートル=ダム=デュ=ラック教会、ドロームのサン=レスティテュ教会などにおいても見ることができる。西ファサードにはやは

30.1.16d　Saint-Symphorien, porte sud.

り足場用の小穴が並んでいる。半円頭形の扉口と切妻部分の半円頭形の窓が上下に並ぶ形になっている。20 世紀の初めには凱旋アーチの上に載る鐘楼は半ば崩れていたが、1991 年からの聖堂全体の修復工事の際に再建されている。



30.1.16d　Saint- Symphorien, abside.

聖堂内部は 2 ベイからなる単身廊形式で、方形のピラストルに支えられた幅のある半円形の横断アーチによって区切られている。側壁には半円形の壁アーチが並ぶ（東側ベイの南壁には、外壁と同じように古い石積みが残されている）。壁アーチを受ける方形のピラストル（壁付き柱）にはパルメットや大きな尖葉の彫刻装飾が並ぶコーニスが付けられている。天井は半円筒形トンネル・ヴォールトであるが、その起拱点に水平に付けられたコーニスは、さまざまな形のパルメット文様が美しく彫刻されたフリーズとなっている。南側の側壁に付けられたフリーズにはパルメットの下に、卵形のいわゆる「オーヴ」（ove／Egg-and-dart）装飾が連なっている。凱旋アーチには、方形の窓が付けられ、開口部の上は内部にあってもヒナギクの花弁彫刻のタンパンとなっている。その下の半円形の後陣には水平に巡るコーニスの上に半ドームが架かる。後陣の反対側の西壁には、内側が二重のアーチになった出入口が開き、さらに上部のヴォールト近くに半円頭形の窓が開けられているが、アーチ部分に小型のタンパンが付けられ、そのタンパンは、凱旋アーチ外壁に開けられた窓や南壁の扉口上部のペディメントの場合と同じく、放射状に花弁を開く半円形のヒナギクの彫刻である。ただしこの西壁（内側）の場合は、窓の中央においてこの小タンパンを、ひねり状に縦溝の付けられた小円柱が支えている。

Clément (1993) pp.247-249; Labande (1902) pp.32-33, pp.170-176; Moreau (1997) pp.171-172; Nougaret et Saint-Jean（1975）p.41; RIP.

30.1.16e サブラン／メジエのサン=カストール教会（Église Saint-Castor de Mégier, Sabran）

サブランから県道 D166 を南へ約 4 キロである。聖堂はメジエの村の中を通る D166 沿いに建っている。建設は 12 世紀で、ユゼス司教レーモン 1 世がいったんはグダルグ修道院に付属せしめたが、その後はトレスクの礼拝堂とともにサブランの管理下に置かれた。18 世紀後半、フランス革命の直前に大部分が建て替えられた。現在のサン=カストール教会は、ロマネスク聖堂の雰囲気はとどめながらも、実際には 12 世紀の建築の名残は、その土台部分（石積みの色が異なる）と、壁面に埋め込まれた一部の積み石（点刻や線刻が認められる）のみである。聖堂自体は 2 ベイからなる方形の身廊に半円形の後陣が続くというシンプルなもので、身廊部には半円頭形で隅切りされた窓が 2 つ、また後陣部には南側に同様の窓（さらに小さい）が 1 つ開けられている。西ファサードには近代になって作られた扉口と丸窓があり、その上には鐘

楼が立つ。
Clément（1993）p.106; Labande（1902）pp.164-165.

30.1.17　カヴィラルグ／ノートル=ダム=デュ=サン=セピュルクル隠修礼拝堂
（Ermitage Notre-Dame-du-Saint-Sépulcre, Cavillargues）

カヴィラルグから県道 D166 を北のサブラン方面へおよそ 3 キロ行き、小山の尾根伝いに西へ向かう細い道に入ると、1 キロほどで開けた場所に建つエルミタージュ（隠修礼拝堂／Ermitage）に至る。この聖堂は、18 世紀終わり頃までは「ノートル=ダム=デ=ザンブル礼拝堂」（Chapelle Notre-Dame-des-Imbres）と呼ばれていた。もともとの建設は 12 世紀とされる。トレスク、カヴィラルグ、サブランの領主であるサブラン家のギヨーム 1 世（または 2 世／Guillaume de Sabran）が、トゥールーズ伯レーモン 4 世とともに参加した第 1 回十字軍（1096-1099 年）から帰還した後に建設したと言われるが、1099 年のイェルサレム占領後のギヨームの消息は必ずしも定かではなく、1105 年までには没したとも考えられている。したがって、ギヨームがこのエルミタージュの創建者であるということは仮説の域を出ない。L.-H. Labande によれば、15 世紀にはエクス司教区の Saint-Justin-de-Sézade 修道院に属したが、その後 1459 年にはカルサン（Carsan）のプリウレと統合された。1639 年、バニョル=シュル=セーズのカルメル会（Carmes de Bagnols）がここを手に入れるが、ポン=サン=テスプリのベネディクト会との間で管轄をめぐる争いが 17 世紀後半まで続いたという。18 世紀になる頃には荒廃も進み、半ば廃墟化していたようである。19 世紀（1854-1860 年）に行われた修復・拡張工事の際に南北の翼廊の礼拝室が増築された。その後はカヴィラルグの教区に編入され、巡礼も訪れるようになっている。

3 ベイからなる東西に長い身廊に対して、19 世紀に増築された南北の翼廊は不釣り合いなほど大きい。北側の翼廊は平面がほとんど円形に近い。12 世紀の古い部分は、東端に付く半円形の後陣と、それに隣接する身廊の東側のベイのみである。後陣は小石材による土台部分の上に中石材の切石がきれいに積まれており、東端に隅切りされた半円頭形の細長い窓が開けられている。それに対して 19 世紀に増築された翼廊および身廊部の外壁は不整形の小さな石が乱積みされている。ただしそれらに付けられた扶壁（ピラストル）は、整えられた切石が組まれたものである。南側外壁の中央の扶壁上部には 1689 年の日時計が埋め込まれている（以前は南側翼廊の窓の下にあったが、近年の修復工事の際にこの場所に移された）。西ファサードは半円頭形のシンプルな扉口と、その上にやはり半円頭形の縦長の

30.1.17　Notre-Dame-du-Saint-Sépulcre

窓、そして三角形の切妻の上にはベイ 1 つだけのすらりとした鐘楼が立っている。その塔頂部は三角形のペディメントである。

聖堂内部は、東西に長い単身廊形式で、天井は半円筒形トンネル・ヴォールトとなっている。ヴォールトはもともとは青く塗られていたが、最近になって側壁とともに上塗りされていた漆喰が取り除かれて石積みがそのまま見えるようになっている。西側の 2 つのベイは 19 世紀のものである。太くて内側に張り出したピラストルとその上に載る横断アーチから東側のベイと後陣が 12 世紀のものである。そのベイの南北にある半円形の翼廊の祭室も新しい。南側の祭室には、半ドームの部分に大きな半円頭形の窓が開く。ほんのわずかに尖頭形となった凱旋アーチは二重になっていて、その内側のアーチは、水平のモールディングが 5 段（あるいは見方によれば 6 段）の、階段状に狭まっていくコーベルが受け止めている。南北の祭室が身廊側に開く半円形のアーチも同様である。こうした階段状のアーチ受けの仕様は、例えばプロヴァンスのシルヴァカーヌ修道院の横断アーチを受けるコーベルにおいて、より完全な形で見ることができる。わずかに尖頭形となった凱旋アーチなどとともに、それはカヴィラルグのエルミタージュがシトー会の聖堂と同じ 12 世紀後半のロマネスク後期のものであることを示唆している（ただしシトー会建築との関連は不明）。半円形の後陣の東端には隅切りされた半円頭形の小さな窓が開き、その上には水平のモールディングを介して半ドームが架かる。
Clément（1993）p.388; Labande（1902）pp.78-81.

30.1.18a　トレスク／ノートル=ダム教会（Église Notre-Dame, Tresques）

トレスクはバニョル=シュル=セーズの南およそ 7 キロにある村である。ユゼス司教区の中では最も早くに防御周壁などで要塞化された集落のひとつで、1060 年のニーム大聖堂のカルチュレール（証書集）には「カストルム」としてその名が出てくる（Castrum quo dicitur Trescas）。ノートル=ダム教会は、村の小丘のほぼ中央に建っている。12 世紀後半にもともとあった古い礼拝堂が建て替えられ、その後ここトレスクの領主であったサブラン家の礼拝堂として使用されたものである。14 世紀後半（1382-1384 年頃）に、Tuchins の反乱がオーヴェルニュからこの地方に波及した際、周辺地域から住民たちがトレスクの城壁内に避難したことを受けて教区教会となった。その後百年戦争や宗教戦争、フランス革命などの際に被害を受け、そのたびに修復･拡張工事が行われたが、19 世紀後半になって大規模に再建された。従って、西ファサードや身廊部はまったく新しいものである。ロマネスク期の名残をとどめるのは、わずかに後陣とトランセプトの一部分だけである。

ノートル=ダム教会のすぐ西には、12 世紀に建てられた城塞の監視塔（tour de guet）が残されている。16 世紀の宗教戦争の際には監獄として使われたという。

トレスクの村から西へおよそ 1.4 キロのサン=ルーと呼ばれる場所にあったとされるサン=ルー・ドゥ・セルヴザン礼拝堂（Chapelle Saint-Loup de Servezan）は、今は完全に消滅している。ここで見つかった 12 世紀頃の祭壇障壁の断片は、現在はアヴィニヨンの碑文博物館（Musée Lapidaire d'Avignon）に展示されている。周囲を組紐文様とパルメットに縁取りされた四角い

枠の中に四方に葉を広げた花弁が 3 つ並んでいる。
Clément（2000）p.371; Labande（1902）pp.208-214, pp.223-224; Narasawa（2015）p.364.

30.1.18b　トレスク／サン=マルタン=ドゥ=ジュサン礼拝堂
（Chapelle Saint-Martin de Jussan, Tresques）

バニョル=シュル=セーズから県道 D5 を南へ約 8 キロ、トレスクからだと県道 D409 を北へおよそ 1 キロの県道沿いに、オリーブの木に囲まれて建っている。ローマ時代のヴィラの跡地に、ピピンがイスラームとの戦いでの勝利を記念して建設したとも言われるが、同じような言い伝えはこの地方には他にもあり、確かなことではない。礼拝堂の周囲からはガロ=ローマ時代の遺物が数多く発掘されており、この場所に古代以来小集落があったことがうかがえる。現在の聖堂の建設は 11 世紀（あるいは 10 世紀末頃）から 12 世紀にかけてのことである（史料における初出は 1485 年）。かつては礼拝堂の周囲に集落とともに施療院や墓地もあった。そのため最初はここが教区教会であった。古くから皮膚病を患う子供を連れた親がその快癒を願って巡礼に訪れるところでもあり、親たちは子供の体を覆っていた衣をこの聖堂の南東に立っている十字架の元に置いて祈りを唱えたという。13 世紀のアルビジョワ十字軍の結果、この地は王領に編入された。14 世紀後半にオーヴェルニュから波及した Tuchins の反乱の際には被害を受け、隣接する施療院なども破壊されている。また 14 世紀末には、百年戦争の混乱やあちこちを荒らし回る傭兵たち（Grandes compagnies）から身を守るために、この地域の住民たちが防御を施されたトレスクの城壁の中に移り住み、それにともなって教区教会もトレスクのノートル=ダム教会に移された。16 世紀には一時荒廃するが、教区教会でなくなった後も長い間この礼拝堂には、皮膚病快癒を祈願する巡礼が訪れ、彼らのための祭式が執り行われ続けた（この巡礼は驚くべきことに 1950 年代まで続き、今日までこの礼拝堂が比較的良好な状態に保たれているのはそのおかげであるとも言われる）。17 世紀にはこの場所はコンティ公の所有となるが、フランス革命の後は国有財産として売却された。その後 1839 年から 1872 年までヴォギュエ（Vogüé）伯家に連なる一族がここを墓所として所有し、この一族のうちシャルル・ルイやジョゼフなどが礼拝堂の中に葬られている（ヴォギュエは現在のアルデッシュ県南部の小都市）。1970 年代以降、礼拝堂はトレスクのコミューンの所有となっている。19 世紀には何度か修復工事が行われたが、最近では 1990 年に大きな工事が行われている。窓にステンドグラスがはめられたのは 1980 年代初めのことであった。

30.1.18b　Saint-Martin de Jussan

この聖堂は、2 ベイからなる身廊に半円形の後陣が付くというシンプルなものであるが、サブラン（コンブ）のサン=ジュリアン=ドゥ

=ピストラン礼拝堂［30.1.16b］、あるいはやはりサブランにあるブサルグのサン=サンフォリアン礼拝堂［30.1.16d］、さらにはヴェネジャンのサン=ピエール礼拝堂［30.1.12b］などとの間に、多くの類似点を見出すことができる。聖堂の建設は、大きく 2 つのフェーズからなるとされ、最初のものは 11 世紀後半の 1080 年頃（または 1050 年頃）から 1100 年頃にかけてで、後陣とそれに続く身廊の東側のベイ（特に下半分）が最も古い。その部分は、おおよそ四角く削られた小石材（砂岩）が粗く積まれている。次のフェーズは 12 世紀後半の 1150 年頃からで、西側のベイと方形の鐘楼が造られた。切り整えられた中石材（石灰岩）が主体となったきっちりとした石積みとなっている。石には石工の刻印なども見られる。後陣には大きさの異なる切石が積まれている。下部が最も大きめで、上に行くほど切石は小さくなる。小さなアーチが 3 つ一組となったロンバルディア帯が巡り、これはヴェネジャンのサン=ピエール礼拝堂と同じ仕様である。東端に隅切りされたロマネスク様式の半円頭形の窓が開く。後陣の上の凱旋アーチ外壁には、十字形の開口部がある。

身廊部は 2 ベイからなる。外壁には南北ともに扶壁が 3 つ付けられている。地形の関係で、南北においては扶壁の高さが異なり、南西角の扶壁が最も高さがある。南側外壁には隅切りされた半円頭形の窓が 2 つ開けられている（ただし高さが微妙に異なる）。そのうち西側の窓は、頭部のアーチ（ヴシュール）の内側が半円形の小さなタンパンとなっていて、開口部自体は縦長の方形である。これはサブラン（コンブ）のサン=ジュリアン=ドゥ=ピストラン礼拝堂などと同じ仕様である。聖堂建設の第 2 フェーズ（12 世紀後半）に当たる西側の身廊の南壁には半円頭形の扉口があって、その上に架かる半円形のアーチ（アーキヴォルト）に施された古い彫刻装飾に注目すべきである。すなわちアーチを構成する 14 のクラヴォー（それぞれ長さ約 30 センチ、幅はまちまち）のひとつひとつに浅浮彫りの彫刻が施されているのである。かなり摩耗しているが、パルメット、アカンサスなどの葉飾り、ヒナギクの丸い花弁、そして向かい合う鳥や二人の人物などが並んでいる。全体として楽園（天国）を表現したものであると言われたりもするが、J. Tardieu や P. A. Clément によれば、こうした鳥や人物は聖マルティヌス（聖マルタン）の伝説にまつわるものであるという。すなわち、左から 7 番目のクラヴォーの向かい合う鳥は、聖マルティヌスがかわせみ（martin-pêcheur）に川の魚を貪欲にむさぼるのを止めさせたエピソード、また左から 5 番目のやはり向かい合う二人の人物は、聖マルティヌスが自らを捕らえた盗賊を悔い改めさせたというエピソード、さらに右から 3 番目のクラヴォーで葉を茂らせる木をはさんで向かい合う二人の人物は、聖マルティヌスを無謀にも樅の大木で打ち倒そうとして失敗した木こりのエピソードなどを表しているという。

身廊の北側の外壁には窓などは開けられていないが、西のベイの下部に「死者の扉口」と呼ばれた小さめの出入口の名残が残されている。かつて隣接していた墓地との行き来のためのものであったと思われるが、現在は埋められている。西ファサードに出入口はないが、三角形の切妻のすぐ下に、二重のアーチに縁取られた半円頭形の窓が開けられている。身廊部東側のベイの上には、ヴェネジャンのサン=ピエール礼拝堂と同じように方形の鐘楼が立つ。この礼拝堂建設の第 2 フェーズ（12 世紀）に造られたもので、半円形の開口ベイが四方に開けられており、ピラミッド型の塔頂部が載る。一番上には十字架が据えられている。ヴェネジャンとは異

なり、ピラミッド型の塔頂部のすぐ下には歯車状のギザギザ文様の帯が巡っている。

礼拝堂内部は 2 ベイからなる単身廊で、東に半円形の後陣が接続する。2 つのベイは半円形の横断アーチで区切られている。身廊側壁には半円形の壁アーチが付けられている。天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトである。西側のベイでは、ヴォールトの起拱点に水平に延びるコーニスにパルメットの彫刻が施されている。この同じベイの北西の角のインポスト（西ファサードの内側の角にあたる）には、翼を持つワシが横長の姿で彫刻されている。またその反対側の南西の角のインポストにはやはり横になって自分の体に腕を回す人物の彫刻がある。それ以外にもこのベイのインポストには、摩耗が進んでいて分かりにくいが、耳の長いウサギのような動物の彫刻も認められる。凱旋アーチを経て身廊の東に接続する後陣には半ドームが架かる。その凱旋アーチに開けられた十字形の開口部と後陣東端の窓からは、晴れた日には南フランスの明るい光が注ぎ込んで堂内を明るく照らす役割を果たしている。

ヤコブス・デ・ウォラギネ（2006b）p.239-240, p.243; BM; Clément（1993）p.106; Clément（2000）pp.371-375; Labande（1902）pp.214-219; Morel（2007）p.62; Nougaret et Saint-Jean（1975）p.49; Provost, et al.（1999）pp.701-711; Tardieu（1975）p.50, pp.55-57.

30.1.18c　トレスク／サン=ピエール=ドゥ=カストル礼拝堂

（Chapelle Saint-Pierre-de-Castres, Tresques）

トレスクの村から県道 D9 を東に向かって県道 D6086 に出る。それをバニョル=シュル=セーズに向けて北へ 1.8 キロほど進んだところで、東へ« Chemin de Mas des Boutes »が分かれるので、それをおよそ 2 キロほど行き、さらにラコー台地（Plateau de Lacau）に向けて北へ登る細い道に入ってそれを 800 メートルほど登ると、森の中の開けた場所に建つサン=ピエール=ドゥ=カストル礼拝堂に至る。トレスクの村からは直線距離にして、北東へ約 4 キロである。

台地の上にあるこの場所には古代ガロ=ローマ時代から集落（oppidum）があったことが考古学的発掘によって分かっている。最初は 7 世紀頃に小さな僧院が建てられたようであるが、現在残るサン=ピエール=ドゥ=カストル礼拝堂は 11 世紀末から 12 世紀にかけて建設されたものである。ガール県東部のこの地域のロマネスク建築では最も古いもののひとつとされる。その時代、サン=サテュルナン=デュ=ポール（Saint-Saturnin-du-Port／現在のポン=サン=テスプリ）の修道院に所属するベネディクト派（クリュニー修道会）の修道士たちがこの場所でプリウレ（小修道院）を営んでいた（その遺構は礼拝堂のすぐ南に残っている）。このプリウレは、その後も引き続きサン=サテュルナン=デュ=ポールの修道院の管理下に置かれ続けることとなったが、16 世紀からの宗教戦争によって、このプリウレにいた修道士たちはいなくなってしまい、ごくわずかな隠修士がこの地にとどまるのみとなった。しかし近隣地域からここを訪れる巡礼（特に頭痛に悩む病者が多かったという）はその後も途絶えることがなく、19 世紀終わり頃までそうした巡礼が続いた。

礼拝堂の建物は、2 ベイからなる身廊（交差部様の内陣を入れると 3 ベイ）に、半円形の後

陣が続く。後陣のすぐ西側のベイには奥行きの狭い祭室が南北に付けられているので、外部にも南北にわずかに張り出している。南側の張り出しには中ほどの高さの所に丸窓が開けられている。また南北共に、この張り出し部分の外壁には足場を組むための小穴がたくさん開けられている。身廊部、後陣ともに、おおよそ四角く切られた小石材や中石材が比較的緩やかに積まれている。身廊部には扶壁はない。南側外壁の西寄りのベイに開けられた扉口には、歯車形の帯に縁取られた半円形のアーキヴォルトが架かる。これは鐘楼を除くと、この聖堂の外壁における唯一の装飾的要素である。半円形の後陣には東端にロマネスク様式の半円頭形の窓が開けられている。切り整えられた石組みによる外側に向けた大きな隅切りが非常に美しい。西ファサードには半円頭形の小さめの扉口が開く。上部の切妻の中ほどにはやはり大きく隅切りされた窓が開けられている。その隅切りのアーチは半円形であるが、窓自体は縦に細長い方形の開口部で、頭部は小さなタンパンとなっている。この西ファサードにも、足場を組むための小穴が数多く開けられている。交差部様の内陣の上に立つ方形の鐘楼（1 辺約 1.7 メートル）には、4 つの面にそれぞれに半円形アーチの架かるベイが開く。南面と西面にあってはそのアーチを小円柱が左右で受けているが、特に南面の小円柱はアカンサスの大きな葉飾りの柱頭彫刻を持ち、それに重なる冠板の上にアーチが架かっている。鐘楼にはかつてはピラミッド型の塔頂部が載っていたと思われるが現在は失われている。

礼拝堂内部は、先にも触れたように内陣を含めると 3 ベイからなる単身廊形式で、その内陣のそれぞれ南北に、奥行きの狭い祭室が付いている。身廊部の天井はわずかに尖頭形となったトンネル・ヴォールトであるが、そのヴォールトの起拱点にはコーニスは巡っておらず、ヴォールトは側壁の壁面から直接連続している。西側の 2 つのベイを区切る横断アーチはやはりわずかに尖頭形で、南北の側壁のピラストル上部に付けられた張り出し（持ち送り）がそれを受ける。身廊側壁に並ぶ壁アーチには、その起点にインポストが付けられており、そこには水平のモールディングや簡素な図形的彫刻による装飾が施されている。凱旋アーチの起点にもインポスト付けられている。半円形の後陣には半ドームが架かるが、やはり水平のコーニスなどは見られない。

CAG, 30/3, p.701; Clément (1993) pp.216-217; *DEF, IIc,* pp.216-217; Labande (1902) pp.147-154; Leclaire（1994）pp. 469-470; Morel（2007）p.63 ; Nougaret et Saint-Jean（1975）p.49.

30.1.18d　トレスク／サント=マドレーヌ礼拝堂

（Chapelle Sainte-Madeleine, Tresques）遺構▲

トレスク周辺のロマネスク聖堂の中でも、非常に古いもののひとつに数えられる。言い伝えによれば、サン=ピエール=ドゥ=カストルのプリウレの修道士（クリュニー修道会士）たちがトレスクの北にあった沼地を干拓し、その傍に建てたものであるらしい。最初はサン=ピエール=ドゥ=カストルの集落のための教区教会であったが、10 世紀にイスラーム勢力によって破壊されたとも言われる。しかし L.-H. Labande によれば、残された遺構は 11 世紀以前にさかのぼるものではなく、おそらくは 1050 年前後のものであるという。したがって、同じトレスク

のサン=マルタン=ドゥ=ジュサン礼拝堂［30.1.18b］よりも少し後に建設が始まったものである。しかしその後は時の経過とともに荒れ果て、16 世紀には盗賊や追い剥ぎの棲家となっていたようである。17 世紀には半ば廃墟と化し、その後一時的に納屋として利用されたりもしたが、現在では外壁の一部とクリプト（地下礼拝堂）のわずかな遺構が残るのみである。ガール県東部のこの地域ではクリプトを持つロマネスク聖堂は他にないので、そういう意味では貴重な遺構であるとは言えよう。ただしこのサント=マドレーヌ礼拝堂の遺構は、L.-H. Labande によるとトレスクの北およそ 2 キロ、県道 D5 沿いの« Bouyas »という場所にあるというが、残念ながら筆者には確認できなかった。

文献によると、建物は 2 ベイからなる身廊（長さ 11.5 メートル、幅 6 メートル）で、側壁内部には壁アーチが付けられていた。西壁には扉口が開けられていたと思われるが、荷車などを通れるようにするためにその扉口は完全に取り壊された。後陣は半円形で、その下にクリプトがあった。形は、上にあった後陣部と同じで、その天井はほとんど曲面がないと言ってもいいほどの三心アーチである。クリプトには身廊の中ほどの所から階段で下りるようになっていた。東端と北側の地表すれすれの位置に、内側に向けて隅切りされた窓（採光部）が開けられていたようである。

Clément（2000）p.371; Labande（1902）pp.219-222.

30.1.19　ラ・バスティード=ダングラ／サン=ジャン=ドルジュロル礼拝堂（Chapelle Saint-Jean-d'Orgerolles, La Bastide-d'Engras）遺構

ラ・バスティード=ダングラの村は、バニョル=シュル=セーズからだと県道 D6 を西へ 15 キロ進み、D23 に入って南へおよそ 3 キロ行き、さらに D211 に折れて東へ向かうと 1.8 キロほどのところにある。バニョル=シュル=セーズとユゼスのちょうど中ほどに位置し、ユゼスからだと県道 D23 を北へおよそ 13 キロである。サン=ジャン=ドルジュロル礼拝堂へは、村の東に「ラ・バスティード公園」（Parc de la Bastide）があるので、徒歩でその公園の中を東へ向けて横断する。さらに森の中のハイカー用の細い道である« Chemin de Monargue » を 500 メートルほど行くと北へ分かれる道があるので、その道に入り 400 メートルばかり細いダートを歩くと、目の前の林の中に礼拝堂の尖塔が見えてくる。「ラ・バスティード公園」から徒歩で片道およそ 20 分程度である。礼拝堂はターヴ川（La Tave）とその向こうに広がる田園地帯のパノラマを見下ろす高台に建っている。

ラ・バスティード=ダングラの村の名前は、1211 年の国王フィリップ 2 世（フィリップ=オーギュスト）の証書の中に出てくる。アルビジョワ十字軍の騒乱の際にはトゥールーズ伯レーモン 6 世が奪い取るが、十字軍の後はユゼス司教がこの地を手に入れている。サン=ジャン=ドルジュロル礼拝堂の建設は 11 世紀終わり頃から 12 世紀初め頃とされる。テンプル騎士団の所有する聖堂であったと言われることもあるが、これは確かなことではない。少なくともかつてこの場所にあった集落の住民のための墓地教会としての役割は果たしていたようである。またラ・バスティードやここから 1.5 キロ東の Pougnadoresse の住民のためにミサなどの祭事を行

っていた。もともとは身廊が 1 ベイという小さな聖堂であったが、そうした祭事などにも手狭であったために、後にベイを 2 つ増築して、都合 3 ベイの身廊へと拡張された。15 世紀と 16 世紀にも改修工事の手が加えられているが、とりわけ 16 世紀の工事が大規模なもので、大きな方形の鐘塔がロマネスク様式で建設された。ちょうど宗教戦争の時期にあたり、防御的な役割も持たされていたと思われる。実際、その戦争の際には攻め寄せる敵よって包囲されたりしている。またこの時期には、鐘塔とともに西ファサードが建て替えられ、さらに身廊南側に側室が 2 つ増築された。西側の側室はサン=ミシェル礼拝室（1531 年）で、それより少し小さめの東側の側室は聖具室として利用された。18 世紀になると、礼拝堂の司祭とラ・バスティードの住民の間で、聖堂の管理や祭事のあり方などに関してもめ事が頻発するようになったらしい。しかしそうしたいざこざも 1789 年の大革命によって吹き飛んだようで、それ以後この礼拝堂はあまり使用されることもなくなり、荒廃の一途をたどることとなった。16 世紀に増築された 2 つの側室は、19 世紀初め頃にはかなり崩れてしまっていた。L. Alègre の残した 19 世紀中頃のスケッチには、崩れかかった東側の側室の様子が描かれており、その東側外壁には丸窓が開けられているのが分かる。ただし現在ではそれらの側室はまったく失われてしまっている。1910 年になると今度は身廊のヴォールトが大規模に崩落し、それに伴って身廊南側の壁や後陣の後ろの凱旋アーチなども倒壊してしまった。身廊の南側外壁は、最近になってそれを支えていた 2 つの扶壁ともども修復・再建されている（ただしその部分だけ新しい石の色が際だって白い）。なお礼拝堂の南に接して、かつてのラ・バスティードの村の墓地の跡があり、今でも古い墓石がいくつか放置されたままになっている。村の新しい墓地は 1908 年に、村の南東のはずれに移されている。

30.1.19　Saint-Jean-d'Orgerolles

サン=ジャン=ドルジュロル礼拝堂の身廊は 3 ベイからなり、そこに半円形の後陣が付く。12 世紀ロマネスク期の部分は、この後陣とそれに続く身廊のベイの北側の壁である。後陣外壁は主に切り整えられた石灰岩の中石材がきっちりと積まれていて美しい。東端には中ほどの高さの所に、外に向けて大きく隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。頭部は弧形の一枚岩（モノリス）である。後陣の上部の切石は下部のものよりも少し小さめの切石となっている。円錐形の屋根のすぐ下には円筒形のモールディングが巡っている。反対側の西ファサード（16 世紀）には、半円頭形の扉口があり、色の異なるクラヴォーが組まれたアーキヴォルトが架かっている。その上には頭部が扁平アーチとなった小さな窓が開けられている。崩れることのなかった身廊の北側の壁は、太くて高い 4 つの扶壁によって強固に支えられている。身廊北側には開口部は見られない。16 世紀に聖堂の南西の角に増築された方形の鐘塔は大きくてがっしりとしたもので、その高さは 21 メートルである。上部には各面に鐘を吊すための半円頭形で縦

長のベイ（開口部）が付けられているが、東面のみそれが 2 つ開けられている。その上にはピラミッド様の尖塔が載る（小さな方形の物見窓がいくつかあけられている）。この鐘塔には、もとは南東角に内部が螺旋階段になった五角形の小塔が付いていた。これは 1880 年代には残っていたが、その後崩れてしまい、現在は塔壁の一部を残して消滅している。

礼拝堂内部は、3 ベイからなる単身廊形式で、それに半円形の後陣が付く。この後陣は南北の横幅 4 メートル、東西の奥行き 2 メートルで、水平に巡らされたコーニスの上に半ドームが架かる。床面にはかつて祭壇が置かれていた石の基壇が残されている。また壁面には聖具や聖遺物などを置いたと思われるニッチの跡が残されている。中央には内部に向けて大きく隅切りされた細長い半円頭形の窓が開く。その頭部（アーチ）は、外側と同じく弧形の一枚岩である。身廊部は東のロマネスク期のベイの南北の側壁に半円形の壁アーチが付けられており、それらのアーチはインポストを介してピラストルとなって床まで下りる。身廊南側の側壁には 3 つのベイすべてに同様の壁アーチが見られるが、北側の壁の西の 2 つのベイには壁アーチは付けられていない。なお南側中央のベイの壁アーチの内側には、かつてそこに接続していた側室（祭室）との間に架かっていた尖頭アーチの痕跡が残されている。今は側室自体がないので、その尖頭アーチも埋められている。身廊部のヴォールトはそこに架かっていた半円形の横断アーチともども崩落して失われているが、ヴォールトの起拱点に巡らされていたコーニスが部分的に残っているのが認められる。

サン=ジャン=ドルジュロル礼拝堂は、時代の流れの中で荒廃や倒壊の運命に翻弄された聖堂である。しかし 15 世紀から 16 世紀にかけてのゴシック末期に、ロマネスク様式の雰囲気を残しながら修復・増築された珍しい例であるとも言える。歴史的文化遺産として今後もよりよく保存してゆくための、さらなる努力が求められるところである。

Clément（1993）p.395; FSAF, Cahier no. 02, 1982, pp.140-141; Labande（1902）pp.132-137; *ML*.; RIP.

略記号と参考文献

BM.：Base Mérimée.

CAF：*Congrès Archéologique de France.*

CAG：*Carte Archéologique de la Gaul.*

DEF：*Dictionnaire des Églises de France.*

FSAF：Fondation pour sauvegarde de l'art français.

GV　：Guide de Visite.

ML：*Midi Libre.*

RIP：Renseignements ou Informations sur Place.

（なお各聖堂のビブリオグラフィーでは、文献などはアルファベット順に、また GV と RIP は最後に記した）

ヤコブス・デ・ウォラギネ（2006a）『黄金伝説 1』前田敬作・今村孝訳、平凡社、2006 年。
――――――（2006b）『黄金伝説 4』前田敬作・山中知子訳、平凡社、2006 年。
Anonyme（1897）：*Généalogie historique de la maison de Sabran-Pontevès*, réimprimé, 2018, Hachette Livre.
Alègre, Léon（1871）：« Autel roman déposé au musée de Bagnols（Gard）», in *BLM*, 1871, pp.396-399.
――――――（1908）：*La baronnie de Bagnols*, Nîmes, reimprimé, Éditions Hachette livre, 2008.
Bardy, Benjamin, et al.（1966）：*Dictionnaire des Églises de France, IIc, Cévennes–Languedoc Roussillon*, Paris, Robert Laffont.
Béraud, Pierre（1941）：*Histoire de la ville de Bagnols-sur-Cèze*, Nîmes, Éditions de la Maison Carrée,
――――――（1957）：*Bagnols-sur-Cèze en Languedoc*, Avignon, Maison Aubanel Père.
Chabrier, Jean（1999）：*Bagnols-sur-Cèze, L'Église paroissiale, les orgues,* Bagnols-sur-Cèze, L'Association sauvegarde des orgues.
Clément, Pierre A.（1993）：*Églises Romanes oubliées du Bas Languedoc*, Montpellier, Les Presses du Languedoc.
――――――（2000）：« Saint-Martin de Jussan », in *CAF,* pp.371-375.
Dieltiens, Dominique（2011）：*Châteaux et forteresses du Midi*, Portet-sur-Garonne, Nouvelles Éditions Loubatières.
Favreau, Robert et Michaud, Jean（1988）：*Corpus des inscriptions de la France médiévale, tome 13, Gard, Lozère, Vaucluse*, Paris, CNRS Editions.
Labande, Léon-Honoré（1902）：*Études d'histoire et d'archéologie romane. Provence et Bas-Languedoc, I. Églises et chapelles de la région de Bagnols-sur-Cèze nord-est du diocèse d'Uzès*, dessins par M. Léon Alègre, Paris, Picard et fils.
Laville, abbé de（1877）：« Églises rurale, croix et oratoires », in *Bulletin du Comité de l'art chrétien*, Nîmes, pp.115-122.
Leclaire, André（1994）：« Tresques (Gard), La chapelle de Saint-Pierre-de-Castres », in *Archéologie médiévale*, no. 24, Paris, CNRS Éditions, pp.469-470.
Maufras, Odile（2019）：« Bagnols-sur-Cèze（Gars）. Église Saint-Jean-Baptiste», in *Archéologie médiévale*, no.49, Paris, CNRS Éditions, pp.263-264.
Moreau, Marthe（1997）: *Les châteaux du Gard du moyen âge à la Révolution*, Montpellier, Les Presses du Languedoc.
Morel, Jacques（2007）：*Guide des Abbayes et Prieurés en région Rhône-Alpes*, Lyon, Éditions Autre Vue.
Narasawa, Yumi（2015）：*Les autels chrétiens du Sud de la Gaule（Ve-XIIe siècles）*,

Turnhout, Brepols, 2015.

Nougaret, Jean et Saint-Jean, Robert（1975）: *Languedoc roman,* Saint-Léger-Vauban, Zodiaque.

Provost, Michel, et al.（1999）：*Carte Archéologique de la Gaul, 30, tome 3, Le Gard*, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, 1999.

Tardieu, Julienne（1975）：*Recherches historiques autour de la chapelle St-Martin-de-Jussan de Tresques*, Nîmes.

Web-site

BM.：Base Mérimée.（http://www.culture.gouv.fr/culture/inventai/patrimoine/）
2020.10.1 アクセス

FSAF.：La Fondation pour sauvegarde de l'art français.（http://www.sauvegardeartfrancais.fr）
2020.10.1 アクセス

ML.：Histoire et Civilisation de l'Uzège
（http://histoireetcivilisationdeluzege.blogs.midilibre.com/archive/2010/04/16.html）
2013.1.12 アクセス